

男はその部屋の前に近づき、ネームプレートを読んだ。まったく知らない名前だった。

「おうおう、来てくれたの」となかから老人の声が聞こえた。

「おとうさん、お元気そう」

（おとうさんだって！）

またしても血が逆流するのを感じる。妻の父親はたしか自分たちが結婚する前に病死したと聞いていた。嘘だったのか。それに、妻の父親は地方都市の信用金庫に勤めるサラリーマンだったはずだ。よしんば生きていたとしても、こんな、ほんのひと握りの金持ちしか入院できない病院にいるはずはないのだ。だとすると、妻は誰の子供なのだ。

「ミチコも変わらないねえ」

妻の名前はミチコではなかった。いったい自分の妻は何者なのだろう。男は部屋に押し入ろうかと何度も考えたが、どうしてもできなかった。真実を知るのが怖かったのかもしれない。あるいは、得体の知れぬ女を妻にしている自分に少し酔いたかったのかもしれない。金縛りにあったように部屋の外にたたずんでいると、やがて声が少し途切れて、妻がハイヒールを響かせて部屋のなかを歩きまわる音や、冷蔵庫をぱたんと閉める音がした。老人のために何かをしてやっているのだろう。

「ありがとありがと」と老人が礼を繰り返した。

「おとうさん、あたしのほかに誰かお見舞いに来た？」

「いや、おまえだけさ」

「そう。じゃ、桜の花を飾っておくわね。好きだったでしょう」

「ありがとありがと」

三十分ほどして妻が帰ったあと、物陰に隠れていた男はドアの前に近づいた。老人に尋ねてみようかしょうか迷っていた。少しドアが開いている。男はそつとドアを押して

なかを覗^{のぞ}いてみた。浴衣姿の枯れ木のような老人がベッドに横たわっているのが見えた。老人は、窓辺に置かれた桜の枝を熱心に眺め上げている。その頬に涙が幾筋も流れていた。

その晩、男が定刻に帰宅すると、いつものように妻が玄関に出迎えた。

「お帰りなさい。あら、どうしたの」

男は妻の顔をじっと見つめた。きつめのパーマをかけた平凡な中年の女にまた戻っている。ただ、眉の辺りにしつかりとペンシルで描いた筋が少し残っていた。夢ではなかったのだ。男は勇気をふりしぼった。

「おまえ、きょう出かけただろう。俺、タクシーのなかから見たんだよ」このあと、あのじいさんは何者なんだ、と問い詰める予定だったがまともに妻の顔が見られなかった。しかし、妻は一瞬驚いた顔をしてから、ぷつと吹きだした。

「何だよ、何で笑うんだ。あの服見たことないぞ。いったい何の用事だったんだよ」

「見違えたでしょ？」と妻はにやにやした。「ね、不倫現場でも見たと思ったでしょう。でも、あれねえ全部借りもののなのよ」

「どうして？」と、男は啞然^{あぜん}としながら、妻のテニス焼けした首筋を眺めた。

「バイトなのよ。テニス仲間に、ぼけちゃった寝たきり老人の父親がいる人がいるの。それで娘のふりしてお見舞いにいくバイト。『後藤』で季節の花買って娘のふりして一万。みんながやりたがって順番待ちなのよ」

男の胸に桜を見つめる老人の姿が浮かんだ。あの涙。

「やめろよ、そんなバイト。最低だよ」

妻が呆^{あき}れたように唇を尖^{とが}らせたが、男の腹立ちは収まらなかった。不倫のほうがまだよかったよ、俺は。男は妻の薄い眉を睨^{にら}みつけ、どうして自分はこんなに腹を立てているのかと思った。